

『土佐日記』の記録性と文学性

井波 真弓 (白百合女子大学), 齋藤 兆古 (法政大学), 堀井 清之 (白百合女子大学)

Aspects of Record and Literature in “Tosa Diary”

Mayumi INAMI, Yoshifuru SAITO and Kiyoshi HORII

ABSTRACT

The aspects of record and literature in “Tosa Diary” have been clarified by the multi-resolution analysis of wavelets. The author of this diary literature, Ki no Tsurayuki, a court nobleman of high rank, had been appointed Governor of the Province of Tosa, in Shikoku, in 930 and the diary is an account of his journey home by sea to Kyoto, which was then the capital.

The aspects for analysis has employed following three elements; the verb as a record, the verb with auxiliary verb as feelings, and the 31 syllables Japanese poem as a literature. The wavelets analysis has visualized its fluctuation of elements of record and literature in “Tosa Diary”. The verb gives a vivid description of his journey in particular in the beginning and the end. The function of the verb with auxiliary verb indicates a complementary movement with the 31 syllables Japanese poem in the first half. Arranged in chronological order, the 31 syllables Japanese poem goes along with the verb with auxiliary verb in the latter half.

It is evident two elements of literature are inserted into the record and literary value is raised gradually in the end.

Keywords: Verb, Verb with Auxiliary Verb, 31 Syllables Japanese Poem, Multi-Resolution Analysis, Wavelet Transform

1. 緒論

本稿の目的は離散値系ウェーブレット多重解像度解析を用いて日記文学『土佐日記』¹⁾がどのような記録性と文学性をもつて構成されているかを検証することである。

記録としての日記は次第に文学性が付加されることで、歌日記を経て日記文学となった。日記²⁾とは個人や公私の機関が、日ごとに出来事を記したものである。国史学の世界においては、日記をさして記録と称することが一般的に行われている。これは資料として用いられる記録類の中で、量も多く過去を調べる上でとりわけ有効であるからである。『万葉集』巻17~20の資料となった大伴家持の歌日記は、特定の事態や行事、あるいは日常的な実務、公私の生活、見聞などを記録する日記の中で、とくに筆者の主體的な行為や人生観が強く表され、内省的・感動的内容を持ったものとして、広義の日記文学ととらえる場合がある。この歌日記の文学性は主として和歌に依存している。日記文学とは平安時代に成立した文学ジャンルで、特定の限られた体験にもとづいて、その人生を再構成し、その内面像を改めて表出した一群の文学作品をさし、時に虚構も加えられる。それは事実を基盤としつつもそれに盲目的に従従せず、その奥に人生の真実を追究するところに本質がある。日記文学は日次記ではなく、回想録風に、しかも過去の人生と現在の心境との緊密な関係を通して、内観的・主體的な独自の世界が造立され

ている。

『土佐日記』の作者紀貫之(868頃~945年頃)は30歳代で『古今和歌集』の選者に選ばれ、編纂を主導した。930年、土佐守に任ぜられたが、その在任中に醍醐天皇、宇多法皇、三条右大臣藤原定方、提中納言藤原兼輔らの庇護者が他界した。紀貫之は934年に任期を終え、同年12月21日国庁を出て帰京の途につき、翌年2月16日京の自邸に帰りつくまでの旅を『土佐日記』に著した。帰京後は官職を得られず一時不遇であったが、藤原摂関家に接近することで歌界の第一人者として重んじられた。日本語の可能性や広く日本の伝統文化に決定的な影響を与え、また、その功績は高く評価されている。

紀貫之は平仮名の発生に伴い女性の間にも広まってきた和文に早くから強い関心を示した。和歌の漢詩・漢文に勝る表現力を高く評価し、この作品を和文の表現力を駆使した私的な日記の形にした。男性によって記される変体漢文の日記は政務・行事・儀式などに関する記録が主であり、個人的な感慨をもちあはせても極めてまれで、会話や情景を細かに描くことはできず和歌を記すには適しない。こうした実録の日記から脱して、和文を用い和歌を交えた女性の日記の体裁で、自照性を持つ自由な文芸としての日記文学を創始した。

日記と仮名日記の特色を考察するために竹内³⁾は『土佐日記』の地の文の文末に限り抽出した。文末は大きく用言言い切り文と助動詞言い切り文に分類され、その日その日の出来事の次第

を記録の現在の立場で叙述している文章が主流をなしている結論づけた。しかし日本語の表現に不可欠な助動詞の機能に対しては考察が見られない。そこで、紀貫之が示した強い関心に立ち戻って、漢詩・漢文の中国語と和歌の日本語との間に存在する言語の違いを見ると、漢文⁴⁾には助詞、助動詞、活用語尾が現れないのである。和文を用いることで、心情表現が容易になる⁵⁾。「助動詞」の機能⁶⁾は具体的な事態・事物を表す語について話し手がその事態・事物をどう捉えたか、話し手の心情を表す語で、細やかな表現には欠かせない。「動詞」⁶⁾は語の表す内容が時間の経過とともに変化し、動作、作用、存在の各概念を表す。過去の事態の表現をするとき文語体では動詞だけの言い方ができる。文語体でこれができるのは文語体であるために動詞の内容に抽象性があり、過去の事態の表現も可能となるのである。「動詞」は具体的な行為であり、「助動詞」は話し手の判断の結果である。動詞だけの表現と助動詞を用いた表現との間にはこのような違いがある。冒頭の女性仮託の文から始まる『土佐日記』には55日にわたる旅のすべてが「京」「都」を志向し、「京」「都」へ回帰し、未来への可能性を仮託するに足る「京」「都」の現存を確認するための直進する時間の進行を示すもの⁷⁾であるとの指摘がある。この指摘にしたがえば、「動詞」で言い切る文が日次順に並べられ、話し手が自らをそこに置き、現在と認識して語る記録としての形態をとっていると考えられる。このように「動詞」で言い切る文には記録性を担わせ、助動詞が接続して言い切る文には心情を描くための文学性が担わせられているととらえられる。

日記文学の文学性は「和歌」に大きく依存している。しかし「和歌」は作品の中で独立して存在しているのではなく、記録という時間軸の中に存在し、作品全体の文脈の中でかけがえないものとしての輝きを持つのである。岡本恭子⁸⁾は日記の中にある「時」に見られる二つの概念を指摘する。一つは連動する時間の中で生きる現実の自分で、もう一つは自らの意志で創ろうとする連動しない時間である。高い虚構性を持ちつつも記録性を保つ日記文学という制約の中で、「動詞」「助動詞」「和歌」はその記録性と文学性を表現するために互いに関連性を保っている。

本稿では日記文学の嚆矢『土佐日記』の記録性と文学性についてそれぞれの要素の揺れがどのようにになっているかウェブレット多重解像度解析を用いて考察する。

2. 解析方法

2.1 解析対象

登場人物は、紀貫之の一行、新任の国司、別れを告げに訪れる人々、船頭、京の隣人などである。一行の中には紀貫之の旧作の歌を詠むなどして紀貫之自身の分身と考えられる人々もある。男性の書く変体漢文の日記に習い、ある女性が見聞したこ

とを和文の日記にした形をとることによって、人物の言動特に紀貫之自身の言動も客観的に描き戯曲的效果をあげている。

其年、史実によると934年、12月21日に土佐の国司の館を出発し、出港地である大津に移る。そこで6日間にわたる送別宴に招かれる。27日に大津の港を船出する。船出に際して任地で亡くした女兒を悼み、大湊では都の正月を思う。波静かな浦戸湾を背景に、望郷の念と亡児を思う親の情との争い、利己的な後任者や土着の人々、その中であって心から別れを惜しむ国人たちを描く。船旅は風雨の荒い大海を背景に、天候に左右されて航海のはかどらぬ小さな船中に閉じ込められた紀貫之の一行と航海の主導権を握る船頭とが演じる様々な言動や感情の動きが描かれると同時に自然の危険と海賊の恐怖が室戸岬・鳴門海峡の二つの難所で示されている。その間、50首あまりの和歌を詠みかわし、亡児を追懐し、詠歌の論評をする。阿波の鳴門と紀淡海峡とを横断し、大阪湾の海岸沿いに北上して淀川に至り、さらに淀川をのぼって2月11日山崎に到着する。風波からは解放されたが浅い川水に難渋する淀川の川上りを背景に、迎える都近くの人々や自ら望んで留守を預かった隣人の功利的な態度を描き、帰京を果たしてもなおやむことのない亡児への追慕を詠んだ歌で終わる。

2.2 キーワードの選択と方法

Table 1 Selected Element.

要素	事例
第1要素「動詞」	地の文で文末に限り動詞で言い切る文
第2要素「助動詞」	地の文で文末に限り動詞に助動詞が接続して言い切る文
第3要素「和歌」	和歌の部分

Table 2 Examples of Element.

要素	事例
第1要素「動詞」	<ul style="list-style-type: none"> …船を出して漕ぎ行く。(…船を出して漕いで行く。) 桂川、月の明きにぞわたる。(桂川を、月が明るく照るもとに渡る。)
第2要素「助動詞」	<ul style="list-style-type: none"> …別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜更けぬ。(別れがたく思って、一日中なにかれとやって、がたがたしているうちに夜も更けてしまった。) 今、今日ある人、ところに荷たる歌よめり。(今、まさに今日ここに身を置く人が、この場にふさわしい歌を詠んだ。)
第3要素「和歌」	<ul style="list-style-type: none"> みやこへと思ふをもののかなしきはかへらぬ人のあればなりけり(いざ都への思うにつけても、何かしら悲しいのは、共に帰らぬ人があるからであった) 日をだにも天雲近くに見るものをみやこへと思ふ道のはるけき(あの遠い太陽さえも空の雲知覚に見えるものを、都へと思う道のなんととはるかなことよ)

- 1) 作品の構成を継時的に考察するためにまず、『土佐日記』を和歌の部分と地の文に分け、地の文は文末に限り、動詞で言い切る文を「動詞」、動詞に助動詞が接続して言い切る文を「助動詞」とした。要素には記録としての日記の部分「動詞」、具体的な事態に対する判断・心情としての部分「助動詞」、文学としての部分を「和歌」に選び、日次ごとの使用頻度を調べた。Table 1, 2 は要素を示す。
- 2) 得られたデータに離散値系ウェーブレット変換の多重解像度解析を適用する。

2.3 分析

次の手順により作品の構成を離散値系ウェーブレット多重解像度解析^{9)・10)}で解析する。作品を分析するため3個のキーワードを解析データ要素とする。日次毎に各要素数をカウントする。継続する日次の継時変化を評価するため、日次毎の3要素の百分率 D_i は、要素数を F_i とすると式(1)で与えられる。

$$D_i = \frac{F_i}{\sum_{j=1}^3 F_j} \times 100, \quad (1)$$

i は要素で $i=1,2,3$ である。

作家は登場人物にいろいろな意味を持たせているために求めたデータには重複部分がある。すなわち、対象とする物語全体を通して抽出された百分率要素が構成するベクトルは互いに直交していない。このため、線形空間論におけるグラムシュミット法を用いて百分率要素 D_i が構成するベクトルの正規直交化^{9)・10)}を行なうには、まず第一要素を直交化データ D'_1 とすると、式(2)として与えられる。

$$D'_1 = D_1,$$

$$D'_i = D_i - \sum_{j=2}^i \frac{D'_{j-1} \cdot D_i}{D'_{j-1} \cdot D'_{j-1}} D'_{j-1},$$

$$i = 2,3$$

$$C_i = \frac{D'_i}{\|D'_i\|}, \quad (2)$$

$$i = 1,2,3$$

$\|D'_i\|$ は絶対値でベクトルの大きさを示し、 D'_i は直交化データである。 C_i は正規直交化された百分率要素ベクトルである。ドピッチーの2次基底^{11)・12)}を用いて、離散値系ウェーブレット変換を C_i に適用すると、ウェーブレットスペクトラム S_i が得られる。

$$S_i = WC_i, \quad (3)$$

式に(3)において、 W はウェーブレット変換行列である。日次数が64のデータ数に対する離散値系ウェーブレット多重解像度解析は、式(4)として与えられる。

$$\begin{aligned} C_i &= W^T S_i \\ &= W^T S_i^0 + W^T S_i^1 + W^T S_i^2 \\ &\quad + W^T S_i^3 + W^T S_i^4 + W^T S_i^5 \\ &\quad + W^T S_i^6, \end{aligned} \quad (4)$$

式(4)で、上添え字 T は行列の転置、 $S_i^k, k = 0,1,2,3,4,5,6$ はウェーブレットスペクトラムを示す。Fig.1とFig.2は、それぞれ、横軸を日次、縦軸を百分率要素 D_i とした『土佐日記』の要素の解析対象データを示す。

3. 結果と考察

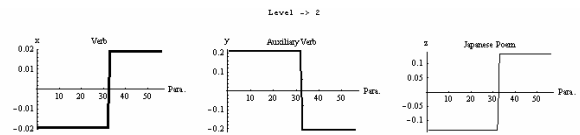


Fig.1 Level 2 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: *Tosa Diary*.

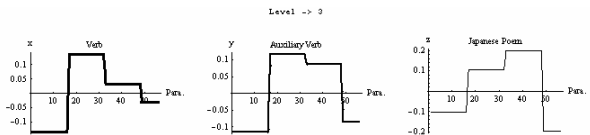


Fig.2 Level 3 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: *Tosa Diary*.

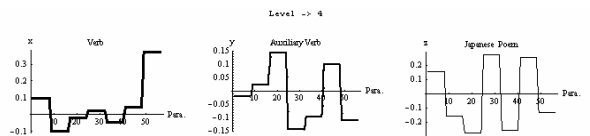


Fig.3 Level 4 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: *Tosa Diary*.

『土佐日記』における解析結果から、「動詞」は初めの部分と結末に揺れが見られた。「助動詞」と「和歌」は前半部に相反する傾向が見られたが、後半部になると同様の揺れが見られた。以下、離散値系ウェーブレット多重解像度解析による詳細な分析結果を述べる。横軸は日次の数を示し、縦軸は要素の頻度の変化率を表す。

実際のデータ数は56までであるが、解析には2のべき乗のデータが必要であるため最後の段落に57から64段落をゼロデータとした¹¹⁾。また、結果はゼロを追加した段落を削除してある。離散値系ウェーブレット多重解像度解析は、全体、半分、1/

4, 1/8...というように段階に分けて分析し, これをレベル1, レベル2と呼ぶ. レベル1では作品全体の平均を示す. レベル2では半分に分けた1段落から32段落の平均と33段落から64段落の平均の変化を示す. レベル3では4等分した1段落から16段落の平均と17段落から32段落の平均の変化, 33段落から48段落の平均と49段落から64段落の平均の変化である. レベル4では8等分である.

3.1 作品の構成要素に関する解析結果

作品の要素の揺れを把握するため分析対象を2等分したレベル2の結果をFig.1に示す. 「動詞」と「和歌」は前半部が少なく後半部が多く同様の揺れが見られる. 旅の後半では京到着を踏まえ, 記録を残すこと, 和歌を詠むことという紀貫之の官職と歌人との姿が窺える.

次に分析対象を4等分したレベル3の結果をFig.2に示す. 「動詞」と「助動詞」は前後半部が一番多く, 次に前後半部が多いが後半部は少なくなっている. 「動詞」と「和歌」は相反する傾向で揺れている. 船の進行を記す一方, 官僚にとって大きな意味を持つ「あをうま(白馬の宮中の節会)」に思いを寄せ, 和歌に対する考えを述べている. 京や和歌を思うにつけても, 感情が大きく揺れている. 後半部は「和歌」が多く, 文学性が高くなっている.

Fig.3には分析対象を8等分したレベル4の結果を示す. 「動詞」は初めの部分と結末に比較的大きな揺れが見られ, 中間部は揺れが少ない. このことから記録性は冒頭と結末を意識しつつ作品全体の記録性が保たれていることが認められる. 「助動詞」と「和歌」は前半部に相反する傾向が見られ, 互いに補完する関係が認められる. 後半部になると「助動詞」と「和歌」には同様の揺れが見られ, 文学性が積極的表現されている. 「助動詞」の前半に多い箇所は京のことを思うも, 天候が悪く船が進めないところである. 後半は京が近づき喜んだのも束の間, 川を上り始めても船が進まず, 苛立ち, 同船人を批判する表現が目立つ. 「和歌」は冒頭, 中間部, 後半部と三つの部分で多くなっている. 望郷の念と亡児を想う親の感情が表れている部分, 和歌に対する自分の考えを述べる部分そして京に上り始めて喜ぶ部分である. 「和歌」の部分は感情を表す「助動詞」とあいまって, 紀貫之の京への募る想いが高められていく. 自邸に戻った紀貫之は淡々とした情景描写でその寂寥感を表現している.

4. 結論

- (1) 離散値系ウェーブレット多重解像度解析を用い, 『土佐日記』における三つの要素「動詞」「助動詞」「和歌」の揺れを可視化し, 日記文学の嚆矢『土佐日記』における記録性と文学性の揺れを考察することができた.
- (2) 「動詞」は初めの部分と結末に比較的大きな揺れが見られ, 中間部は揺れが少ないことから, 記録性は冒頭と結

末を意識しつつ作品全体の記録性が保たれていることが認められる.

- (3) 「助動詞」と「和歌」は前半部に相反する傾向が見られ, 互いに補完する関係が認められる. 後半部になると「助動詞」と「和歌」には同様の揺れが見られ, 文学性が積極的表現されている.
- (4) 文学性が記録性に挟まれる構成となっており, 記録性を保ちながら文学性が高められていることが明らかとなった.

参考文献

- 1) 紀貫之, 菊池清彦, 木村正中, 伊牟田経久 校注・訳者: 土佐日記 蜻蛉日記, 新編日本古典文学全集 13, 小学館 (1995) pp. 15-56.
- 2) 日本古典文学大辞典編集委員会編集: 日本古典文学大辞典 第4巻, 岩波書店, (1984) pp. 606-608.
- 3) 竹内 美智子: 土佐日記のテンス・アスペクト, 国文学解釈と鑑賞, 至文堂, Vol.58, No.7 (1993) pp. 62-68.
- 4) 川口久雄著: 平安朝の漢文学, 吉川弘文館, (1996) p.92.
- 5) 瀬戸 宏太: 方法としての日記--土佐日記の歌と時間, 常葉国文, 常葉学園短期大学国文学会, No.25 (2000) pp. 1-14.
- 6) 山口明徳, 秋本守英編: 日本語文法大辞典, 明治書院, (2001) p.350, p.520, p.424.
- 7) 菊田 茂男: 『土佐日記』の時間的構造--クロノスとアイオンの構図, 人文社会科学論叢, 宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所, No.11 (2002) pp. 1-17.
- 8) 岡本 恭子: かな日記と時間, 駒沢大学北海道教養部研究紀要, 駒沢大学北海道教養部 29, (1994) pp.1-9.
- 9) 水田義弘: 数学基礎コース=S1 理工系 線形代数, サイエンス社, (1997).
- 10) 木村元昭, 武居昌宏, 齋藤兆吉, 堀井清之, 齋問暁: ウェーブレット多重解像度を用いた凝縮電流画像の分離, 可視化情報学会論文集 23(2) (2003), pp.9-16.
- 11) 齋藤兆吉: ウェーブレット変換の基礎と応用 Mathematica で学ぶ, 朝倉書店 (1998) p.39, pp.93-95.
- 12) 堀井清之, 齋藤兆吉: 特許「文学作品解析方法および解析装置」, 特願JP10-102673A.